

特集

# 子供たちの 日常空間に 遊びを届ける！



新型コロナウイルス感染拡大の影響により、子供の屋外での体験活動の場や機会が少なくなっている中、子供たちの活動は多くの制約を受けています。国立成育医療研究センターが実施した第5回「コロナ×こどもアンケート」\*1によると、小学生以上高校生以下の子供のうち、42%が「コロナのことを考えると嫌な気持ちになる」と回答しており、多くの子供たちがストレスや不安感を抱いていることが読み取れます。

今回の特集「子供たちの日常空間に遊びを届ける！」では、「冒険遊び場(プレーパーク)」に焦点を当てています。冒険遊び場とは、プレーリーダー\*2や地域の大人が見守る中、自然の素材や道具・工具を使いながら、子供が思いのままに自分たちで遊びを生み出せることを目指した手づくりの遊び場のことです。

今回は、特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会の代表である関戸博樹さんに、冒険遊び場の歴史や現状、今後の展望についてお話を伺いし、冒険遊び場の活動を紹介します。

\*1 国立成育医療研究センター「コロナ×こどもアンケート第5回調査 報告書」(2021年)

\*2 プレーリーダー…プレーパークで、子供の見守りや遊びの補助などを行う役割の大人

冒険遊び場に携わることになったきっかけを教えてください。



日本冒険遊び場づくり  
協会代表  
関戸博樹さん

もとは大学で社会福祉の勉強をしていましたが、実習を契機に、学問より実践、特に地域福祉の視点からの実践に関心を持つようになりました。またその当時、遊びを通して地域の子供と関わるサークルに所属しており、その活動の中で、冒険遊び場の存在を知りました。

冒険遊び場の活動を通して、自分の専門である社会福祉の実践と共に、子供を含め地域に暮らす人たちの自己実現を支えるきっかけづくりや地域との繋がりがづくりができるかもしれないと思い、プレーリーダーを志しました。



# とうきょう 冒険遊び場MAP

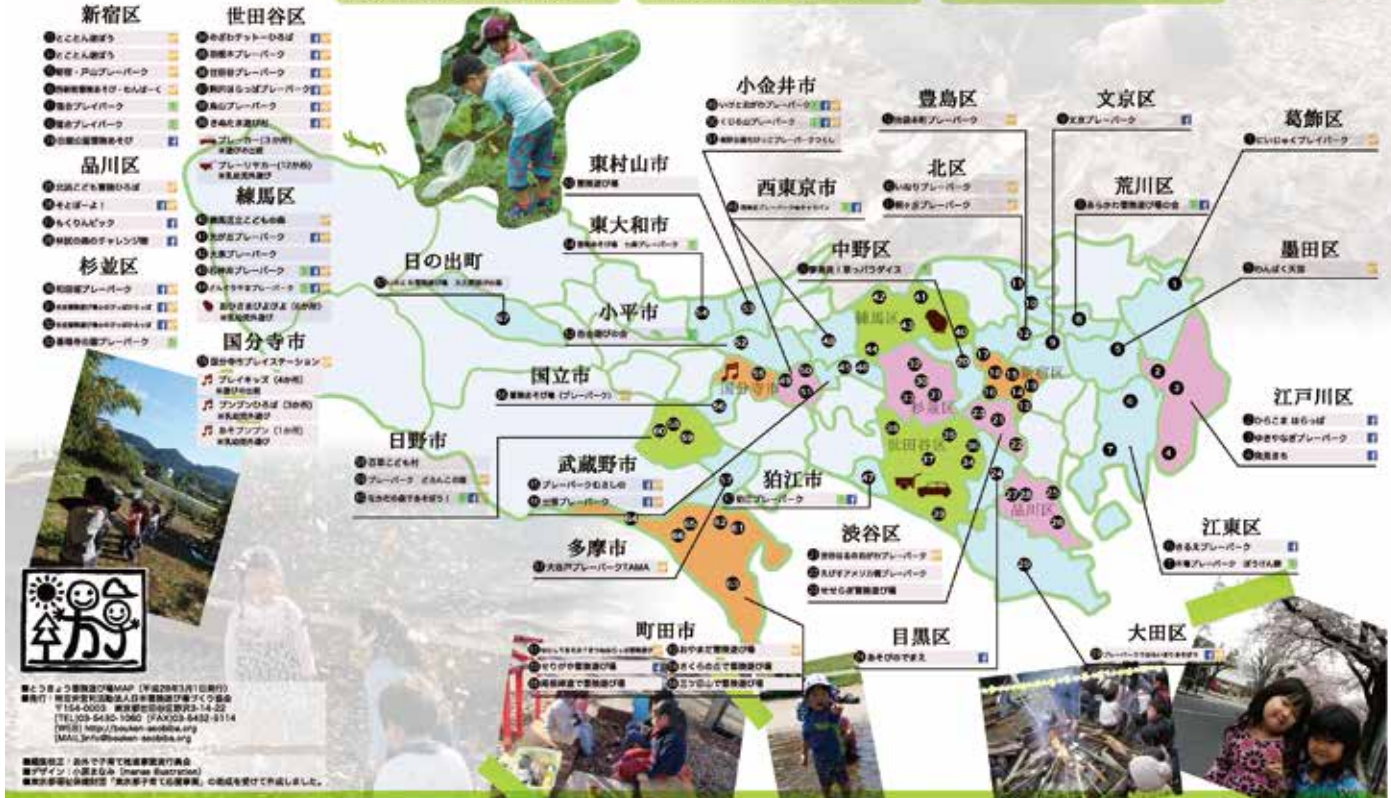
**冒険遊び場（プレーパーク）とは？**  
 「子どもが思いのまま遊べるような遊び場を、1943年にデンマークで始まり、その後、イギリス、ドイツ、スイス、カナダ、オーストラリアなど、世界各地に広がりました。日本では、1970年代に一般に広がりを見せました。2019年2月現在およそ400箇所が冒険遊び場づくりでできあがっています。その多くは民間の市民が主体となり、公園の一画などを借りて行われています。プレーリーダーや地域の大人が指導する、自然の素材や道具・工具を使いながら、子どもが思いのままに自由に遊び、自然と向き合えることを目指した子どもの遊び場です。

**東京のお外で子育て**  
 園の外の自然環境とは違い、市内各地に400箇所にも及ぶ民間主導の遊び場があります。年齢中心の施設運営が少なく、年齢の異なる子どもも一緒に、その場に、自然でのびのび遊ぶ子どもたち。自然の中で遊ぶのが大好きです。「子どもって遊ぶってなんなんだ」「大人なんて遊ぶんだ！」「内助も、まあいいから」などなど、思いっきり遊んで、新しい発見や子育ての楽しみなどが増えてくるんじゃないかと、お外で遊ぶのが、ママさん、パパさん、お友達さん。

**NPO法人日本冒険遊び場づくり協会**  
 「子どもが思いのまま遊ぶ場所がほしい」と、冒険遊び場づくりを始めたグループ。市町村や行政などへ、冒険遊び場の開設、施設を借りています。また、講座や、人材育成、ネットワークづくりなども行っており、遊びあえる場所の提供を目指しています。特に、民間主導の冒険遊び場づくりを全国に広げることを目的として、NPO法人として活動しています。冒険遊び場づくりに関心のある方は、ぜひぜひまでお問い合わせください。詳しくはホームページ<http://japan-outdoor.org/>

遊び場数

|     |
|-----|
| 9~  |
| 6~8 |
| 3~5 |
| 1~2 |



都内の冒険遊び場をまとめた「とうきょう冒険遊び場MAP」(日本冒険遊び場づくり協会「東京冒険遊び場マップ A面(2016年発行)」より)

## 冒険遊び場の歴史について教えてください。

冒険遊び場の発祥の地は、1943年のデンマークだと言われています。当時、公園づくりに携わっていた人が、自分の作った子供向けの公園では子供たちは遊んでくれないのに、隣の空き地や廃材置場の方が子供たちに人気があることに気がきました。観察するうちに、子供たちが自分で遊びを作り出す力があるのだと感じ、そうした要素を取り入れた遊び場を作ったことがはじまりです。その考え方がロンドンに広がり、現在の冒険遊び場に繋がったと言われています。

日本では1970年代に、ヨーロッパの各地の遊び場の実例を収めた『都市の遊び場』※3という本の翻訳に携わっていた大村夫妻が、東京都世田谷区で子育て仲間と冒険遊び場づくりを始めたことを機に、冒険遊び場が全国各地に広まりました。

※3 アレン・オブ・ハートウッド卿夫人著、大村虔一、大村璋子訳、鹿島出版会(1973)

## 冒険遊び場の特徴について教えてください。

子供たちが自発的に取り組むというのが一番の特徴だと思います。冒険遊び場のことをよく「アスレチックのある公園」や「野外体験プログラム」などと同じような括りで語られることもありますが、それらとは違うものです。例えばアスレチックのある公園の遊具で子供たちが遊ぶときに、遊び方の工夫はできても、遊具をつくり変えることはできないですね。遊具も含めて、子供が作ってみようと思ったときに作ることができるのがポイントです。また、大人が子供のためにする活動ではなく、遊びとは「子供が子供のためにする活動」と捉えて環境を用意するのが、冒険遊び場だと思います。

## 冒険遊び場にルールなどはありますか？

基本的にルールや禁止事項などはありません。プレーリーダーなどのスタッフがコントロールするというよりは、冒険遊び場にいる子供や大人たちの了解や合意形成を図ることが大事で、問題が発生した場合も、子供たちと一緒に解決していくことが大事だと思います。





## 子供の成長の過程で、冒険遊び場の役割や効果について教えてください。

子供たちが学区を超えたつながりを作ることができるのは、冒険遊び場の魅力だと思います。子供たちは学校での自分のポジションのようなものがありますが、それを引きずることなく、遊ぶことができるのが良いと思います。

また、冒険遊び場は「自由に遊べる場所」なので、「遊ぶことで自ら育つ」ことができる場所になっています。遊んでいる瞬間の子供は、ある意味、勤勉で、誰の命令も受けず、誰からも言われることなく、一生懸命に自分でやるべきことを見つけます。そういった意味では、私が思う「遊ぶ」というのは「学ぶ」と同義だと思います。自らやりたいと思えば、「遊ぶ」も「学ぶ」も本当は同じことで、学校教育の場であっても、今すぐく面白いなと感じて「学ぶ」子供もいるだろうし、遊び場で夢中になって遊びながら感じている「学び」も、同じだと思います。

## 新型コロナウイルス感染拡大の影響によって活動の変化はありましたか？

コロナの影響で、屋外で過ごすことや屋外で子供を遊ばせることを選択する人が増えたのではないかと思います。子供がストレスフルな状態を解消するために外出して遊ぶ、ということです。

コロナ禍での活動の難しさは、我々に直接的に遊び場の中で見えるようなものではないと思います。例えば、コロナの影響で、親が失職中の子供や、休校中に自分を表現する場所が家の中になければ本当にどこにもないという日々を過ごしていた子供は恐らくいたと思います。実際に、冒険遊び場の活動を再開したときに、子供たちの言葉と行動の端々にはストレスが溜まっていることが感じられましたし、それを子供が受け止めてコントロールできていないと思うことは結構ありましたね。心の不調を訴えている子供たちも多いとは思いますが、まだまだ冒険遊び

場の活動が多くの子供たちに十分に届いていないというのはもどかしいですね。

## 今後、そういった子供たちにアプローチするための取組はありますか？

今、全国的に増えているのが、子供たちの生活圏まで入っていく移動型の冒険遊び場です。距離の問題などで冒険遊び場まで来られない子供に対して、例えば、学校の隣にある公園や子供たちの生活圏内までリアカーや車で遊びを出前するというものです。

このような移動型の冒険遊び場も含めて、子供の日常に遊びをもっと届けるためには、特に保護者や地域の大人が、自分自身も子供を育てる当事者であるという意識を持つ必要があると思います。また、そういった意識を持ってもらうための啓発活動や仕組みづくりをデザインしていくことも重要だと思います。

しかし一方で、共働き世帯の増加により、放課後や休日に子供たちの遊びを見守る時間がある人たちは少なくなっている現状があります。そのような状況において、大人たちに遊びの重要性をどのように伝えていくのか、また、いかにして支援者を確保していくのかは、今後の私たちの課題だと思います。

## 最後に、読者の皆さまへのメッセージをお願いします。

子供たちの意欲、協調性、忍耐力、コミュニケーション能力等を育てるためには、公教育の場に限らず、地域の遊び場などの「地域教育」の場で、子供が主体的に過ごせる環境が不可欠です。子供の豊かな放課後も支えていきましょう。

子供たちにとっての冒険遊び場活動の重要性について、理解を深めることができました。ありがとうございました。



プロフェーショナル

関戸 博樹さん

特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会代表。2004年から8年間渋谷はるのおがわプレーパークで常勤のプレーリーダーとして活動。現在はフリーランスのプレーリーダーとして冒険遊び場に関わる傍ら、全国の冒険遊び場を中心に子どもの遊び場の立ち上げ支援や人材育成、環境改良など様々な活動を行っている。